

フランス人民戦線政治史研究上の諸問題【二】

平 田 好 成

目 次

プロローグ

一 コミュニテルンとフランス人民戦線との関係 (以上本号)

二 フランス共産党の戦略と戦術との関係

エピローグ (以上次号予定)

プロローグ

一九三〇年代のフランス人民戦線政治史を、プラスシンボルとしての民衆あるいは民衆運動のレベルから、生き生きとした形で再構成する作業は、きわめて困難なものであるといわざるを得ない。歴史形成および歴史変革の主体としての、民衆レベルおよび民衆運動レベルに重点を置くという場合、その民衆とか民衆運動とかの内容や構造などについて、細かい吟味を加えなければならぬであろう。ここでは、その中心勢力や主導的なメンバーを確定し、それらを基軸に据えて、具体的な民衆像および民衆運動像を描き出す必要があるであろう。そのさい、生き生きとした姿で積極的な政治活動を展開する民衆や民衆運動が研究の対象になることはいうまでもない。一九三〇年代の反ファシズム運動を再検討しようとする場合、この民衆は何よりも積極的に政治、経済、文化、思想活動や階級闘争などを展開する労働者、農民、小ブル

ジョアおよびインテリゲンツィアなどの社会階級、層から構成される。従って、広範な社会階級、層が参加した「人民戦線」運動の場合には、こうした民衆の多元的な構成要素の連合 *coalition* の側面と、その多元的な構成要素のそれぞれの階級的性格の側面とが、総合して再構成されなければならないであろう。いわば、民衆の多元性、複合性の側面と、階級性、階層性の側面との複雑なコンビネーションを科学的に分析すべきであろう。こうした視点からする研究へのアプローチは、まだごく散発的にしか芽生えていないといつてよい現状である。

そもそもフランス人民戦線運動は、広範な民衆が直接に関与した反ファシズム的民衆運動そのものであり、この運動は具体的にフランスの政治的方向を大きく左右するほどのダイナミックな内容を秘めていた。民衆および民衆運動の内奥に秘められていた潜在的なエネルギーが、この人民戦線運動の過程を通してはじめて、明白な形をとって爆発したと見ることができる。現実のフランス人民戦線運動は、いくつかの重大な欠陥と限界とのためにやがて退潮に向かつていったが、この運動の過程で發揮された民衆あるいは民衆運動のダイナミズムは、この運動に固有の欠陥や限界そのものを乗り越えようとする勢いを示していた。フランス人民戦線運動を荷なかつ発展させた、これら民衆および民衆運動のもつ深部の力を改めて評価し、それを歴史的に跡づけて見る必要があろう。

フランス人民戦線政治史は、それが現在とあまりにも近接しているので、興味をそそる研究テーマではあるが、しかし困難な多くの問題を内包している。フランス人民戦線の時期の諸問題を説明しようとする場合、各種の関係資料が必ずしもじゅうぶんではなく、また発表されている科学的な著作物もほとんど欠如しているといわなければならない。一九二二年以降の時期については、国家文書 Archives Nationales の記録を閲読することができない状況にある。⁽¹⁾

今までのフランス人民戦線政治史に関する研究は、全国レベルでの、それもとくにパリ中心の域を一步もでていなかった。民衆の生活基盤に密着している地方および地域レベルでの研究は、まだ広大な原野をそのまま残しているといえよう。この原野について散発的ないくつかの研究成果が見られるのは事実であるが、地方および地域レベルでのフラ

ンス人民戦線の実像をも含めて、その全体像が今後一段と深く開拓されていかなければならないであろう。すなわち、農村地方や工業地方、基本的に左翼への方向性を持つ地方や基本的に右翼への方向性を持つ地方、労働運動がフランス社会党 SFIO の影響下にある地方や労働運動がフランス共産党 SFIC の影響下にある地方など、多彩な地方レヴェルでの実証的かつ理論的な研究が、今後出来るだけ細かく追求されなければならないであろう。²⁾ すなわち、「下部から見た」¹⁾ *Dea Bas* フランス人民戦線政治史を開拓するための広大な研究領域がそのまま残されている。民衆および民衆運動のレヴェルでの圧力が、決定的な瞬間^とにフランスの政治的發展方向を大きく左右する要因として湧出したからである。例えば、一九三六年四月二十六日と五月三日の二回にわたって行なわれた国民議會議員総選挙のさいに、人民戦線連合の实在やそれ以前の労働者の闘争はいうまでもないが、その間の五月一日に行なわれた壮大なメーデーにおける大デモンストレーションが、第二回投票の結果に大きな反響を与えたと推定することができる。また、一九三六年六月三日に冶金労働組合との会談を決裂させた経営者側が、六月五日に全国的なレヴェルでの交渉再開に応じたのは、やはりその間に行なわれた広範な政治闘争と労働者の闘争との複合した圧力が大きく作用していたと推定することができる。この輻蕩した圧力が一つの起点となって、六月三日以降に大ストライキの波動が生まれ、またたく間にフランス全土を席捲しながら経営者側に強烈な圧力を加えつづけた。さらに、レオン・ブルム人民戦線政府成立後直ちに首相官邸マティニオン邸で開かれた労使代表による交渉のさい、一九三六年六月七日の十八時十五分から二十三時まで会議が中断し、交渉の成り行きが憂慮された。そのさい、パリで行なわれた労働者階級を中心とする大抗議集會が、あくまで人民戦線の実現を要求し、この熾烈なエネルギーが交渉の継続に大きな反響をもたらしたと推定することができる。³⁾ このような研究上の視点から、フランス人民戦線政治史を生き生きと描きだす努力が必要であろう。

先に述べたように、フランス人民戦線政治史のブラス・シンボルとしての「民衆的な」側面は、無定型の形では把握されない。その側面は、民衆内部のいろいろな勢力、集団、潮流、運動および政党レヴェルなどの組織体を通して、その

実態が把握されるべきであろう。民衆の深部から見た人民戦線、すなわち、下部から見た人民戦線を研究する場合には、こうした組織化された民衆の部分だけでなく、もっと広く、組織化されていない民衆の部分をも当然その射程距離の中に組み入れなければならないであろう。フランス人民戦線に関する底辺の広大な歴史像が、やがて再構成されていかなければならないであろう。⁽⁴⁾例えば、一九三四年二月六日事件直後の段階で、フランス共産党および統一労働総同盟 CGTU の中央指導部が、フランス社会党および労働総同盟 OGT の中央指導部にたいして、旧態依然たる左翼セクト主義的評価を持ちつづけ、かつ反ファッシュ統一行動のイニシアティブをめぐってその覇権を争うことに熱中していたさいに、地方組織レベルでは、サン・ナゼール Saint-Nazaire 市を始め少なくとも十一の主な都市で、大衆レベルでの、社会党系および共産党系両組織による反ファッシュ、議会制民主主義擁護の共同行動が自動的、自生的に発展してきた。下部組織の段階では、民衆運動による統一への圧力の下に、いろいろな組織や団体を含む反ファッシュ委員会が次々と創設されていった。⁽⁵⁾こうした下部レベルでの運動が基軸となつて、中央および全国レベルでの、その後の発展方向が大きな軌道修正を強いられていった。

日本でも、ここ数年来、一九三〇年代の多様な反ファッシュ運動に関する注目すべき労作が発表され始めている。とくに、フランスの反ファッシュ運動に関する研究が、ようやく開花し始めているといつてよい。反ファッシュ運動は、多様な内容と意義とを秘めている研究テーマなので、研究者たちの問題関心の方向は多様であり、かつ新しい研究方法を展開しようとする斬新な試みも見いだされる。⁽⁶⁾フランス人民戦線が、一九三〇年代当時における、広い意味での反ファッシュ運動の一つの有力な構成要素であったことは確かである。こうした位置づけを行なった上で、さらに、フランス人民戦線の意義とその限界などが、より多角的に解明されていかなければならないであろう。そのさい、民衆および民衆運動のレベルを基軸にアプローチを行なうべきであろう。とくに、フランス共産党系の歴史家たちや、それ以外の歴史家たちの研究方法が、厳密に科学的に再検討される必要があることはいうまでもないが、それらの歴史家たちが編み出す歴史理

論や歴史仮説が、何よりも実質的にこの運動を荷ないかつ発展させた民衆の自己解放の鮮烈なエネルギーと、その民衆運動の自律的なダイナミズムとによって、洗い直した形で再評価されなければならないであろう。

本稿では、フランス人民戦線政治史研究上の諸問題の中、先ず第一に、コミンテルンとフランス人民戦線との関係、第二に、フランス共産党の戦略と戦術との関係、という二つの問題に論点をしぼって論及が進められる。そのさい、内外の研究者たちによる最新の文献および資料が、分析の中核になるであろう。本稿は、これまでの筆者の研究テーマの一つの区切りをつけることを意図している。

- (1) Cf. Cl. Willard, J. Chambaz, J. Bruhat, G. Cogniot et Cl. Gindin, *Le Front Populaire*. (La France de 1934 à 1939). Editions Sociales, 1972, p. 7.
- (2) Cf. *Ibidem.*, pp. 50—51.
- (3) Cf. *Ibidem.*, pp. 85—86.
- (4) Cf. *Front Populaire*. Présentation, par Annie Kriegel, in "Le Mouvement Social." Numéro 54. Janvier-Mars, 1966. Paris. pp. 3—4.
- (5) Cf. *Les manifestations du 12 février 1934 en province*, par Antoine Prost, in *Ibidem.*, pp. 20—21.
- (6) 「一九七一年の歴史学界—回顧と展望—」『史学雑誌』第八十一編第五号 昭和四十七年五月 喜安朗論稿 三四一—三四四頁
 参照 横田地弘「反ファシズム運動—ドイツとフランス」『岩波講座世界歴史』第二十八巻 現代五 「一九三〇年代」 岩波書店 一九七一年七月 一七五—一八一頁参照

一 コミンテルンとフランス人民戦線との関係

コミンテルン研究は、最近ようやく本格的に開始され始めたといつてよい。⁽¹⁾ コミンテルンの活動を記録した文献およ

び資料は、今日膨大な形で閲読することが可能となっているが、それらの素材を個々の具体的なケースにおいて、真に科学的に検討し直すという作業は、まだごく稀にしか行なわれていないといつてよい。コミンテルンの内包していた種々な問題を考証し検分する科学的な研究は、いわば広大な荒地を残したままになっているといつてよいであろう。

ここで取り上げる一九三〇年代のコミンテルンとフランスの労働者統一戦線および人民戦線との相関関係も、そうした問題点の一つである。フランス人民戦線の有力な構成メンバーの一つであったコミンテルン—フランス支部（フランス共産党）とコミンテルンとの相関関係を主題として考えて見た場合、そこには、おおまかにいって、三つの論点を抽出することができるであろう。第一の論点は、一九三〇年代にコミンテルンおよびフランス共産党が実行に移した、労働者統一戦線政策および人民戦線政策の理論的正統化という問題である。第二の論点は、それらの政策の実践という問題、いかえれば、それらの政策が、どのようにして、国内的レヴェルや国際的レヴェルで徐々に描きだされ、明確にされ、定式化され、そして、適用されていったかという問題である。国内的レヴェルや国際的レヴェルでという場合、それは何よりも、フランス共産党とコミンテルンとの間の複雑な内部関係のレヴェル、およびフランスの国内情勢やヨーロッパ全体の情勢のレヴェルなどを具体的に意味している。第三の論点は、フランス共産党とコミンテルンとの間の日常関係の構造という問題、むしろそのスタイルに関する問題である。その場合、とくに、フランス共産党のコミンテルン中央に対する盲目的な服従関係という問題や、逆にフランス共産党のコミンテルン中央に対する独自の發揮という問題が争点となるであろう。この争点では、両者の間の偶発的な意見の交換や討論、とくに、意見の衝突から生まれるもつと複雑な弁証法的関係が問題となるであろう。要するに、国際共産主義という独特なシステムの中における国際的な極と国内的な極との相互作用が、実際にどういう役割を演じたかがそこでは問われなければならないであろう。

先ず第一の論点については、コミンテルンの歴史全体の中で、統一戦線および人民戦線についての理論が、どのような起源をもち、それらがどのような迂回曲折を経て発展していったかが、大まかに把握されなければならないであろう。

この論点について、反共産主義の方向性をもつ文献および資料、とくに、アメリカなどの文献および資料は、こういう形で問題を提起しないで、総じて、統一戦線政策および理論は、一九三四年の半ばに、当時ソ連が展開していた外交政策を支持するために、突如として発明されたという観点を示している。⁽³⁾ フランス社会党の領袖レオン・ブルム Léon Blum 1872—1950 ですら、統一戦線政策を、一九三四年における「事件の急転」*coup de théâtre* を示すものとして、いわゆるモスクワ起源説を採っていた。⁽⁴⁾ 一九三二年までは、社会民主主義に対する攻撃がコミュニストたちの主たる関心事であったが、ソ連およびコミンテルン中央が、一九三一年からドイツに対する政策を転換して、フランスなどに活動の主たる舞台を移行し始めてから、すなわち、一九三二年から、上部での統一戦線を含めた、新しい情勢に適合する新たな統一戦線方式が、萌芽形態という形で誕生しつつあったと見ることが出来る。⁽⁵⁾

周知のように、コミンテルンは、一九二二年に労働者統一戦線戦術を打ちだした。この戦術は、ヨーロッパにおける革命の客観的条件が退潮し始める状況の下で、新たに創出されたものであった。この戦術は、大資本の攻勢に対する労働者階級の防衛戦術という性格を付与されていた。この戦術は、とりわけ、社会党系労働者と共産党系労働者、組織労働者と未組織労働者との間の統一行動を指向する戦術として策定され、重要な点は、下部レヴェルだけでなく、上部レヴェルでの統一戦線戦術をも含むものとして思考されていた点であった。次いで、コミンテルンは、一九二三年六月に、労働者農民政府というスローガンを発表し、その具体的な内容を一般論として規定した。この政府は、あくまでも、資本主義から社会主義への移行期における一段階として考えられる、政府形態の一つであった。この過渡的な性格をもつ労働者農民政府の構想は、その後、コミンテルン議長 G. ジノヴィエフ G. Zinoviev 1883—1937 らによって歪曲され、それは社会主義社会の初期に初めて問題となるプロレタリアート独裁政府と同義語として活用されるにいたった。従って、社会主義への移行および接近の形態としての労働者農民政府のユニークな性格はほぼ完全に消去され、その結果として、この政府構想は極めて単発的な政府形態に誤って固定されてしまった。その後、フランスで問題に上ぼった、真の人民戦線政府

le véritable gouvernement du Front populaire と云うフランス共産党独自の政府構想の中には、この種の発想がじゅうぶんに払拭されないまま固着していた側面のあることを否定することができない。⁽⁶⁾ 真の人民戦線政府という構想は、歪曲して理解された労働者農民政府とほとんど同一のカテゴリーで発想されていたと考えられるからである。

一九三〇年代の「ファシズムの時代」に抵抗する目的をもつ、新しい統一戦線および人民戦線戦術に関する思想は、具体的には、一九三二年から一九三四年までの間に用意されたと考えることが出来る。一九三二年八月のいわゆるアムステルダム運動が、その嚆矢であることはいうまでもない。総じて、フランス人民戦線運動の過程でフランスの知識人グループ、例えば、いわゆる「アムステルダムブレイエル運動」Le mouvement dit d' "Amsterdam-Pleyel"、⁽⁷⁾「反ファシスト知識人監視委員会」Le Comité de Vigilance des Intellectuels Antifascistes、⁽⁸⁾「革命的作家芸術家協会」[Association des Ecrivains et Artistes Révolutionnaires など]が果たした、重要な意味をもつ統一への触媒的な役割が注目されなければならない。⁽⁹⁾ しかし、歴史的に見れば、これらの思想は、すでにそれ以前に遠い起源をもっていたと考へることが出来る。今までのところ、この人民戦線の思想の起源や萌芽形態についての研究は、ほとんど未開拓なままの状態に残されているといえよう。例えば、レーニンは、一九一七年十月革命直前の九月半ばに書いた、「さしせまる破局、それとどうたたかうか」という論文やその他の労作の中で、第一次世界大戦後芽生え始めていた国家独占資本主義への諸傾向を鋭く洞察し、ここでは、独占の力と国家の権力とが完全に結合しており、かつ国家独占資本主義は社会主義社会への一歩もしくは数歩の段階である、という点を強調している。その社会主義社会を実現するためのプロレタリア革命の道は、きわめて多様性に富んでおり、しかもそれへの準備段階として、国家独占資本主義の下で、例えば、銀行および大企業の国有化や労働者管理の完全な確立などを実現する以前の過程で、真の革命的民主主義派が、独占の力を制限し切り縮めるとともに、国家権力の統制、監督および記帳などを規制していく必要があること、を強調している。そして、レーニンは、当時のロシアが置かれていた特殊な条件の下で、労働者階級が小ブルジョア大衆と広範な同盟関係を結ぶ必要

があることを強調し、この労農同盟を基礎として、前述したプロレタリア革命およびそれへの準備段階を戦い抜いていかなければならないことを強調した。当時のロシアで小ブルジョア大衆といえ、その大部分が農民大衆であったが、この小ブルジョア大衆は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの中間にあつて動搖を繰り返す地位にあり、従つて、革命的プロレタリアートは、農民の中でも、その大多数を占める貧農層と固い同盟関係を結んで、プロレタリア革命を推進する強固な革命的民主主義派を構成しなければならないことが強調されていた。⁽⁸⁾レーニンはまだ、一九一七年五月上旬に開催された「ロシア社会民主労働党(ボ)第七回(四月)全国協議会」における決議の中で、「第一次世界大戦の勃発によつて、最も発展した先進諸国で、社会主義革命の客観的な前提が一層成熟し、独占資本主義が国家独占資本主義へ移行しつゝあり、生産と分配に対する社会的統制が実施され、全般的な労働義務制に移行しつゝあると述べた。そして、生産手段の私的所有が維持されている場合、生産の独占化と国营化の強化を目指すこれらの方策は、不可避免的に、勤労大衆の搾取の強化、圧制の強化、搾取者に対する反抗の困難の増大、反動と軍事的専制の強化、および大資本家の利潤の法外な増大と勤労大衆の債務奴隷化を伴う点を強調している。そのため、ロシアのプロレタリアートは、その他の広範な勤労諸階層、とくに小農民的住民大衆と堅固な同盟関係を樹立して、労働者、兵士、農民その他の代表ソヴェトの権限を拡充し、さらに、ロシアと種々な国の労働者との同盟関係を再建し、こうして、世界社会主義革命の前提を一刻も早く創り出す必要があることを力説した。⁽⁹⁾これに反し、フランスのA. ロズメル Alfred Rosmer 1877—1959 らをはじめとするアナル・コーサンディカリストたちは、労農同盟論などの必要性を全く認めず、プロレタリアートの革命的行動のみによつてすべての課題が解決されると主張し、プロレタリアートはその他の勤労諸階層との同盟関係に絶対移行すべきではないと一貫して強調した。このように、先ず第一に、社会主義への道にいたる民主主義的な段階としての人民戦線の思想と、第二に、大資本に抵抗する諸階級同盟としての人民戦線の思想は、つとに早く、その萌芽形態を表わしていたと考えてよいであらう。しかし、この萌芽形態は双葉の中にその芽を摘み取られた観があつた。すなわち、人民戦線思想の萌芽形態は、

一九二七年以降、国際共産主義運動の舞台では完全に忘却されてしまったからである。その生きた例証として、一九二八年に開催されたコミンテルン第六回大会では、労働者統一戦線戦術が、社会民主主義反対および「下部での」統一戦線という戦術に狭く制限されてしまったからである。

第二の論点は、統一戦線および人民戦線の思想が、フランス共産党およびコミンテルンの政策の第一義的に重要なレヴェルにどのようにして、またいつ到達したかという、すぐれて政策実践上の問題である。この問題は、歴史的に見れば、二つの局面、すなわち、第一に、一九三二年から一九三三年までの準備の局面と、第二に、一九三四年から一九三五年までの実現の局面とに分けて考察すべきであろう。先ず、第一の局面には、四つの主要な要因が含まれていると考えられる。第一に、ファシストの危険とドイツの経験の教訓、第二に、フランス共産党からのセクト主義的指導部の排除、第三に、阿姆斯特ダム運動の出現、第四に、社会党系労働者の精神状態の変化が、それらの要因に数えられる。¹⁰

先ず、一九二九年の秋に勃発した世界経済恐慌は、世界資本主義体制に大きな衝撃を与えた。すでに、一九二八年七月に開かれたコミンテルン執行委員会第十回総会は、この恐慌の可能性を予期し、告示していた。世界中にたちまち、約三、五〇〇万の完全失業者が溢れた。ソ連だけが、恐慌を知らなかった。資本主義諸国では、階級闘争が激化し、ストライキが頻発し、失業者の果敢な行動が続出した。一九三一年、スペインでは共和革命が成功した。矛盾は、ドイツ、ポーランドなどでとくに強烈に作用した。一九三〇年、インドシナではイエンーバイ暴動が起こった。世界中で、労働運動、民族解放運動が高揚し始めた。資本主義各国でファシズム政治体制への傾斜が見え始めた。コミンテルンは、一九三〇年末から、その機関紙等を通じて、ドイツをはじめファシズムの台頭の危険を鋭く警告し始めた。一九三一年三―四月に開かれたコミンテルン執行委員会第十一回総会は、ファシズムをもっぱらブルジョアジーの弱さの現われとして指摘した。後にG.ディミトロフ G. Dimitrov 1882—1949 が指摘したように、当時かなり多くのコミユニストたちが、一九二九年恐慌を史上最後の恐慌と考え、資本主義諸国はこの恐慌から到底抜けられないと考え、従って、この最大のピンチは必然

的にプロレタリア革命によって終焉するであろうと考えていた。この傾向は、フランスでも見られた。しかし、プロレタリアート独裁のテーゼは、当時、大多数の労働者たちの直接の希望には照応しておらず、それかといって、民主主義の防衛のための動員については必ずしもその必要性を認めていなかった。そして、コミュニストたちは、社会民主主義をブルジョアジーの基本的な支柱、ファッショ化の支点として固定化し、スターリンは、社会民主主義に主要打撃を集中するという誤ったテーゼを編み出した。これらの誤った視点は、ドイツでその実例を見出した。当時、ドイツ共産党は、評議会^{レリ}会^テドイツ、ソヴェトドイツの実現を、直接の戦略目標として固持していた。情勢分析の不正確さが、この誤りを生み出していた。ドイツ共産党は、即時革命を指向し、ナチス勢力を過小に評価していた。しかし、ドイツ共産党の誤りは、ドイツ社会民主党の誤りほど重いものではなかった。ドイツ共産党は、反ファシズム闘争の唯一の党として行動し、なんどもドイツ社会民主党にファシズムに反対する共同行動を提唱し、その都度拒否されつづけていた。ドイツ社会民主党は、そうした行動を希望しなかった。社会民主主義は、総じて、ファシズムに対する受動性のみを發揮した。すなわち、A II ヒトラーは「合法的」な道を通って権力の座に据わったと評価し、さらに、A II ヒトラーのとくに外交政策だけは支持すべきであるといった主張すらその一部には見られた。

第二の要因としてあげられるのは、フランスにおけるセクト主義反対闘争の経験であった。ドイツとは対照的に、フランスでは、一九二九年末からあらゆる公式主義的な諸傾向が、党内から適時駆逐されていった。一九三〇年に新書記長に選出されたモーリス・トレーズ Maurice Thorez 1900—64 は、コミンテルン中央と協力して統一戦線戦術の「正常化」作業に取りかかった。当時の党内情勢を分析して、M II トレーズらが見た、統一戦線戦術の理論的、実践的実情はおおむね次のように要約することができよう。当時、フランス共産党は統一戦線戦術を完全に「忘却」して行使せず、ただか数人の同調者^{レンダ}労働者を集めて統一戦線を実現するという体裁を採る、極めて戯画的な使用方法で当座を糊塗している状況であった。社会民主主義全体を社会ファシズムと断定すると同時に、統一戦線を断念しかつ部分的要求を完全に放棄

する、党内の左翼主義的危険については、これを過小に評価して適切な処置を採ることを怠っていた。当時、党は労働組合を党の道具として機械視し、さらに党と一般大衆とが完全に切断され、従って党は単なる饒舌とセクト主義の体質に染まり切っていた。⁽¹⁾ フランス共産党は、早急に、未来の革命の党というイメージだけでなく、企業その他のあらゆる領域における日常闘争の唯一の党というイメージをも具備する政党に脱皮する必要があった。しかし、当時党指導部を掌握していたバルベーセロールグループ *Groupe Barbé-Célor* は、一九三〇年からフランスが革命的危機の状態に突入したと判断し、直接的諸要求のための闘争などは時代遅れの闘争であると断定して、統一戦線を完全にサボタージュしつづけた。バルベーセロールグループは、フランス社会党全体を社会ファシストとして性格づけ、ブルジョアジーの血走った走狗としてこれに集中砲火を浴びせつづけた。共産党活動において生起する左右偏向、すなわち二つの戦線にたいする適確な闘争の方針は完全に放棄され、自らの立場である左翼セクト主義の立場から、唯一の右翼偏向である右翼日和見主義的戦線の破壊にのみ専念していた。こうした党の左翼セクト主義の病原を根絶するために、M||トレーズは統一戦線政策の再建にその全精力を傾注し、当国民衆の生活基盤から湧き出てくる直接的諸要求の防衛闘争を出発点とし、そのすべての価値をこうした諸要求の実現に結晶させようと懸命の努力を傾けた。党活動の正常化と同時に、党員大衆の民主主義化が、党が新しい型の大衆政党へ転化するための必須条件であった。一九三二年八月のアムステルダム大会は、こうした党づくりに絶好の機会を与え、新指導部はこの運動に最大限の努力を払うこととなった。

第三の要因としては、このアムステルダム運動をあげなければならない。このアムステルダム運動には当時、フランス社会党の一四一の支部が関与し、それは約一万の社会党員を包含していた。多数の進歩的インテリゲンツィアが、反戦反ファシズムの統一目標の下で、人民結集の起爆剤としての役割を遺憾なく発揮した。この運動の過程で、社会党員大衆が社会民主主義指導部にたいする暗黙の批判および非難を行なうようになった。他方、M||トレーズはフランス共産党内のいくつかの抵抗に直面して果敢な党内闘争を展開した。アムステルダム運動にたいする党内の抵抗は、例えば、あらゆる

平和のための諸勢力を結集することを過小に評価したり、そのための大胆で広範な活動の必要なことを理解しなかったり、小ブルジョアジー、とくにインテリゲンツィアとの共同の活動についてセクト主義的な恐怖感を抱いたりする態度として表明されていた。一九三二年八月のアムステルダム大会を契機に、フランス各地にいわゆるアムステルダム運動委員会が活気を呈し始め、爾来約二年間の経緯を経て、一九三四年七月二十七日に社共行動統一協定が締結されるという成果を生んだ。コミンテルン自体、フランスにおけるこの統一戦線協定の起源をアムステルダム大会に求めていた。事実、この一九三二年の初めに、P||セロール Pierre Célor は、コミンテルン執行委員会派遣フランス共産党代表のポストを剝奪された。一九三二年八月九月のコミンテルン執行委員会第十二回総会における、O||クシーネン Otto Kuusinen 1881—1964のフランスに関する報告の決議に基づき、M||トレーズら新指導部は、当時の党の孤立化した諸傾向に打ち勝ち、対大衆政策、労働組合対策、失業者防衛政策、都市活動対策、議会活動レヴェルでの対策、財政政策および公務員の要求などについての詳細な要求プログラムに基づいて、共産党、社会党、カトリック組織および無党派集団を含む共同闘争組織の作成に努力を集中し始めた。M||トレーズらは、当面の要求項目から、プロレタリアート独裁に関する要求項目を外し、また以前のように、社会民主主義のファッシュ化というスローガンを日々繰り返すことを慎重に忌避し始めた。M||トレーズは、自叙伝『人民の子』の最新版の中で、フランスにおける広範な統一戦線運動の起源を、ドイツファシズムの樹立期に合わせ、一九三三年の初めからと修正している⁽¹²⁾。旧版ではいづれも、その始期が一九三四年の初めからとされていたものである。

第四の要因として、フランス社会党系労働者の精神状態の諸変化があげられる。フランス社会党指導部は、フランス共産党などからの共同闘争の申し入れをなかなか聞き入れなかった。フランス社会党リーダーの多くの者が、ドイツファシズムの魅力に取り付かれたように見えた。マルセル||デア Marcel Déatらのネオファシスト的傾向を有する極右派グループだけでなく、若干の「左派」指導者、例えばポール||フォール Paul Faure 1878—1960らにも、こうした傾

向が看取された。彼らは、ナチスドイツに部分的な社会主義の面影を見ていた。レオンブルムですら、一時ナチズムが社会主義へ向かう中間的過渡期の政体であり、それは資本主義と社会主義との間の移行の一つの社会的タイプではないかと考えていた。⁽¹⁸⁾ こうした社会党指導部の情勢判断とは対照的に、フランスの社会党系労働者たちは、果敢な反ファシズム共同闘争に立ち上がり始めていた。例えば、一九三三年六月、パリのブレイエル広間で開催された反ファシスト世界大会には、フランス社会党員約二〇〇名の参加者が数えられたし、ライプチヒ裁判係属中のG II デイミトロフ擁護の運動にもかなりの数に上る社会党員の参加者が見られたし、さらに一九三三年九月、パリで開催された青年闘争統一大会には、参加者全体の約一割にあたる一一〇名余の社会党員の出席者が見られた。一九三三年八月、社会主義インタナショナル・パリ協議会は、内外情勢の急速な諸変化に強い衝撃を受け、社会党指導部の中の真正左派グループ、例えばジャン・ジロムスキー Jean Zyromski らは、反ファシズム行動統一への転換を真剣に考慮し始めた。

一九三三年十一月十二月に開催されたコミンテルン執行委員会第十三回総会は、ファシズムの階級的性格についての定義を確定すると同時に、ナチズムを主要な敵 *l'ennemi n°1* と断定した。ファシズムは、極反動的な独占資本に対して、ブチブルジョアジー、すなわち農民、職人、使用人、方向感覚の欠如した公務員、大都会の階級脱落分子 *declasses* 等の大衆の基盤を保障すると同時に、この基盤を有力な橋頭堡としてさらに労働者階級内に浸透を図った。第十三回総会は、ファシズムがけっして不可避な段階ではないことをも強調し、それは反ファシズム闘争の諸勢力の行動と能力とに依存することを明確にした。さらに、第十三回総会は、ファシズムを独占資本家階級と組織労働者階級との二つの階級の均衡の上に成り立つ、ボナパルト主義と規定するトロツキストたちの主張を論難した。

以上見てきたように、一九三二年から一九三三年にかけて、先ず国内的要因として、フランス共産党指導部の変化やフランス社会党員大衆の精神状態の漸進的な変化が見られ、他方国際レヴェルでの要因として、ドイツの悲劇的な経験の反響やコミンテルン支持勢力の拡大、さらにアンリールバルビュスローマン・ロランのイニシアティブなどが見られた。反

ファシズム統一戦線という視点から見れば、この一九三二—三三年は、一つの過渡期であった。すなわち、一九三二—三三年は、極めて排他的な下からの *Partenaires* 統一戦線から組織と組織との間の統一戦線への移行期であった。そして、この組織と組織との間の統一戦線は、一九三四年に始めて実現を見たのである。その実現にさいし、アムステルダム・グループレイエル運動委員会が果たした絶大な貢献は特筆に値するものであった。ところで、前述したコミンテルン執行委員会第十三回総会は、コミュニストたちの終局目標、すなわちソヴェト権力のための闘争というスローガンを降ろさなかった。D・マヌイリスキー D. Manuilski: 1883—1959 らは、ファシズムによって労働運動がかなり致命的な打撃を受けたことを認めた。コミンテルン各国支部は、中間目標の設定を急遽作成する必要性に迫られた。

一九三四年は、反戦反ファシズムを目標とする労働者諸勢力および民主主義的諸勢力が結集を実現する、歴史的な局面が開始された年であった。その重要なイニシアティブは、何よりもコミュニスト運動の側に握られていた。この新しい歴史的な局面を飾る主要な政治的内容は、次の四つの主要な事実によって、具体的に判断することができる。すなわち、第一に、街頭におけるフランス社会党員およびフランス共産党員による反ファシズム共同闘争、第二に、コミンテルンの思想とフランス共産党の思想との相互受精、第三に、コミンテルン第七回大会の準備、第四に、コミンテルン第七回大会それ自体が、そのメルクマールと考えられる。¹⁴⁾

第一の事実は、右翼諸団体¹⁵⁾の下院襲撃の企てに対抗する、一九三四年二月九日および二月十二日の大衆的な戦いによって、その口火が切られた。この戦いで、フランス共産党は決定的な役割を演じた。この戦いは、フランスにおけるその後の反ファシズム闘争の発展のための一大転換点を画した。フランス全土に、フランス共産党のスローガン、すなわち「統一戦線、それは行動である」が響きわたった。大衆が動員され始めた。とりわけ、社会党系労働者と共産党系労働者とが、その中心的な勢力として、積極的に闘争に参加した。こうした大衆レベルからの運動の圧力を受けて、フランス社

会党指導部も、結局この民衆運動に追隨することを余儀なくされた。フランスは、ブリュネンギ内閣時代のドイツとは全く正反対の方向に走り始めた。同じ一九三四年二月、オーストリアでは、四日間にもわたる果敢な反ファシヨ武装闘争が展開された。一九三四年十月、スペインのプロレタリアートは、アストゥリアス地方を中心に、これまた果敢な反ファシヨネストを展開した。これら一連の、反ファシヨ闘争が展開された国々では、社会民主主義組織の中の一定の層が、旧来の階級協調的態度を改めて、急速に階級闘争的姿勢に転換を始めた。

第二の事実として、フランス共産党の貴重な経験は、コミンテルンの新しい戦術の方向づけを助けた。すなわち、労働者階級の統一戦線、農民、プーチブルジョアジー、インテリゲンツィアへのアピール、ファシズムの敗北を第一義的な目標として闘うというMllトレーズの宣言、民主主義的諸自由と諸権利の防衛と拡充のために闘うという態度決定などを内容とする、その経験は、全資本主義諸国の労働運動の模範となり先例とされた。フランスのコミニストたちは、反ファシズム運動の前衛として活動した。一九三四年六月二十三―二十六日のフランス共産党イヴリー全国協議会は、すべての犠牲を払って *à tout prix* 行動統一を実現する方針を打ち立てた。この方針は、フランス共産党の代表も参加した、コミンテルン執行委員会政治委員会 *la Commission Politique de l'Exécutif de l'Internationale Communiste* で決定された方針と完全に一致していた。イヴリー全国協議会でのテーゼは、フランス共産党中央委員会へのコミンテルン執行委員会からの六月十一日付の手紙で示唆されていた。この歴史的な史料は、コミンテルン中央とフランス共産党との共同作成の所産と考えることができよう。当時パリに滞在していたコミンテルンのフランス共産党への派遣委員であった、Ellフリート *Eyzen (Eugène) Fried (Clément)* は、Mllトレーズに命令を与えるようなことはしなかった。二人は、共同で思考し、議論し、そして実践していた。Ellフリートは、Mllトレーズに対するよき助言者としての地位に留まっていた。こうして、コミンテルンは、そのフランス支部とともに、実践から理論へ、そして理論から実践へと、科学的な共同思索を展開し、何よりも、フランス、ヨーロッパ、次いで世界全体の経験を集約し、体系化していった。フランス共

産党は、一九二三年から都合二十六回の統一戦線アピールをフランス社会党に呼びかけていた。それが、一九三四年七月二十七日の社共行動統一協定の実現という形で結実したのである。

第三の事実として、当時コミンテルン執行委員会は、来たるべきコミンテルン第七回大会の準備を開始していた。

GIIディミトロフやDIIマヌリスキーらは、一九三四年六月十四日からのコミンテルン第七回大会準備委員会の中で、ファシズムによって資本主義諸国に作りだされたそれぞれの条件に応じて、一般大衆にもっと理解できるような闘争スローガン、何よりも客観情勢に適合したスローガンを考案する必要があることを強調した。彼らは、こうした新しいスローガンが、プロレタリアート独裁のための直接的闘争という古いスローガンよりも緊急に必要なことを強調した。彼らは、幹部レヴェルを含めて、労働者階級の統一戦線を実現するだけでなく、共産党がブチーブルジョア政党、農民の政党、さらにファシストがその影響下に置こうと努力している各種の組織と交渉し、反ファシシヨ的統一行動の会談を行なう必要があることを主張した。GIIディミトロフらの提言は、準備委員会内部に激しい議論を呼び起こした。彼らの提案が陽の目を見るためには、なお長期の忍耐を要する政治活動が必要であった。ベラIIクン Kun Béla 1886-1939、SIIロソフスキー S. Lozovskii 1878-1952、WIIクノーリン Wilhelm Knorin 1890-1939、王明その他の頑強な抵抗が、次第に克服されていった。一九三四年八月二十一日、コミンテルン執行委員会政治書記局は、それまでのフランス共産党の政策を、フランス共産党中央委員会への書簡の中で完全に承認した。コミンテルン中央とフランス共産党の共同思考の動きが、新しい潮流を切り開き始めた。

こうしたコミンテルンの斬新な政治的考慮にたいして、フランス共産党による大胆な政策決定は注目すべき貢献を行なった。とくに、フランス共産党による人民戦線のスローガンの発表は、その決定打の一つであった。人民戦線のスローガンは、全労働者的、民主主義的諸勢力の戦闘同盟、ファシスト諸団体^{「ゲッ」}の絞殺、武装解除および解散、民主主義的諸権利および諸自由の擁護、「二百家族」のすべての犠牲者の緊急な諸要求防衛などを、その内容としていた。フランス共産党

による人民戦線方式の決定は、国際レビュールにおける責任あるコミンテルン指導者たちの意見に先行して行なわれた。M
 II トレーズの最新版『人民の子』が指示しているように、当時たまたまパリに滞在していたP II トリアッティ (M II エル
 コリ) P. Togliatti (Ercoli, M.) 1893—1964 が、コミンテルンの名で人民戦線の提案を思い留まらせようとした。このP
 II トリアッティの勧告は、スターリンによる人民戦線への否定的な意向をそのまま継受していると考えられる。しかし、
 M II トレーズは、一九三四年十月二十四日、ナントの急進社会党大会に向けて、共産党政治局の決定を堅持し、決定され
 た人民戦線を提案する演説を行なった。

コミンテルンは、急速にそのためらいを克服していった。一九三四年十二月九日、M II トレーズは、コミンテルン執
 行委員会事務局にフランスで実践されている新しい方向づけ、すなわちフランス共産党をフランス国家生活の真の政治的
 要因として位置づけるという転換に関する報告を提出した。コミンテルン執行委員会幹部会会議は、この転換を支持し、
 M II トレーズの報告を了承した。しかし、コミンテルン執行委員会事務局内では、S II ロゾフスキーのような考えの人々
 が、フランス共産党の新しい方向転換を正しいとはなかなか判断しなかった。S II ロゾフスキーらは、フランス共産党が
 それによって自らの手をしばりはしないか、このスローガンに含まれている共和主義的幻想が、党独自の革命的思想を犠
 牲にして一般大衆内で強化されはしないか、という危惧感を強く抱いていた。これに対し、O II クーシネンやD II マヌイ
 リスキーらは、S II ロゾフスキーらの労働運動の新しい問題に近づくさいのセクト主義的、機械主義的方法を非難し、現
 実の差し迫った反ファッショ運動に一般大衆を正しく引き付ける方針を、日和見主義的だと性格づける傾向を厳しく批判
 した。人民戦線は、旧来の「左翼ブロック」《*blocs des gauches*》と共通するものは何一つ持ち合わせていなかった。人
 民戦線は、労働者階級を指導的な要因として、農民と都市の小ブルジョアジーを結集させることを、その最大の目標に掲
 げていたからであった。後に、G II デイミトロフは、コミンテルン第七回大会の席上、次のように述べた。

「フランスは、周知のとおり、労働者階級が国際プロレタリアートにむかって、ファシズムとはどのようになた

かうべきかという模範を示している国である。フランス共産党は、コミンテルンの全支部に、統一戦線戦術をどう実施すべきかの模範を示しており、また社会党系の労働者は、ファシズムとたたかうにあたって他の資本主義諸国の社会民主党系の労働者はいまなにをなすべきかの模範を示している。⁽¹⁵⁾ (拍手)

事実、統一戦線を実現し、さらに人民戦線への移行を果たしたフランスの労働運動は、ヨーロッパにおける全資本主義諸国の中で、第一級の地位を獲得した。

第四の事実は、コミンテルン第七回大会そのものであった。この大会は、一九三五年七月二十五日から約一カ月間にわたってモスクワで開催された。「ファシズムの攻勢と、ファシズムに反対し労働者階級の統一をめざす闘争における共産主義インタナショナルの任務」と題する、G・ディミトロフの報告は、統一戦線政策および人民戦線政策を完全に正統化した。この報告で明らかにされているように、ファシズムが権力を掌握できたのは、何よりも労働者階級が、社会民主主義指導部によって実践された階級協調政策のために分裂し、そして麻痺していたからであった。大会は同時に、各国共産党の誤りをも批判した。各国共産党は、ファシズムの不倶戴天の敵対者であったが、しかし必ずしも全反ファシショ勢力をじゅうぶんに結集するような形では行動しなかった。従って、行動統一が緊急事であった。コミンテルンは、社会民主主義が反動的な集団であると考え、共同行動の可能性を認めた。共産主義運動は、すべてのレヴェルで、すなわち企業内で、地方レヴェルで、全国レヴェルで、そしてインタナショナルレヴェルで、社会党員との統一行動および統一戦線の必要なことを宣言した。共産党は同時に、アナキストやクリスチャンとの統一戦線をも呼びかけた。

統一戦線政策が発展していく中で、政治的統一のための闘争、すなわち労働者階級の統一政党を創設するための闘争という問題が生じた。爾後、大部分の共産党が、社会党員との団結のさいに改良主義的機関による純粹でかつ単純な吸収という危険に冒されないで済むように、じゅうぶんに訓練され、かなり堅固な思想をもつ党員幹部を用意し、さらにか

論 説
なり堅牢な指導部核を準備した。さらに、共産党の描く未来の統一政党的プロファイルが、より正確な次のような条件によって決定された。その条件は、社会民主主義がブルジョアジーと階級ブロックを結ぶことを破棄すること、および社会民主主義がブルジョアジーに対して完全独立の姿勢を保つこと、に要約された。

ファシズムに対して勝利を収めるには、たとえ統一を実現していても、労働者階級の努力だけではふじゅうぶんであった。反ファシズム闘争、民主主義擁護闘争は、住民の圧倒的多数を包含し、農民、都市の小ブルジョアジー、職人、知的労働者各層を、プロレタリアートとの人民戦線に誘導しなければならなかった。コミュニストたちは、ブルジョア民族主義の敵対者であり、この原理を許容しなかった。といって、彼らが民族ニヒリズムの賛同者であり、自分たちの国の運命について無関心な人々である、という風に、中産階級に見られてはならなかった。彼らは、民族的デマゴギーの助けを借りて、また社会的デマゴギーの喧伝によって、ファシズムがその大衆的基盤を確立するのを妨害するよう、自らを適合させなければならなかった。

各国における労働運動が行なう階級闘争がもつ民族的な形態は、決してプロレタリア国際主義と矛盾しなかった。それとは反対に、正にこうした形態の下でプロレタリアートの国際的な利益は、成功裡に防衛することができた。G II デイミトロフが第七回大会で言明したように、

「プロレタリア国際主義は、個々の国の勤労者の民族的、社会的、文化的自由のための闘争と矛盾しないだけでなく、国際的なプロレタリアートの連帯性と闘争の統一のおかげで、この闘争に勝利するために必要な支持を保障するものでもある。」⁽¹⁸⁾

統一戦線政策および人民戦線政策は、労働者階級に対して、事件の流れに決定的な影響を行使できる行動的勢力として、より強く自己を確認できる手段を与える結果を生んだ。これらの政策を通して、労働者階級は、単にプロパガンダのレヴェルにおける資本主義の否定に留まらず、資本主義の具体的な政策、反動攻勢およびファシショ化を否定しかつ失敗

させるため、実践的にかつ直接的に介入することが可能となった。さらに、共産党は、何よりも社会民主主義および改良主義的労働組合の対立者として自己表示することを止めた。共産党は、労働者階級および民族全体の運命を掌中に握った。共産党は、国の政治生活の指導的なファクターに成長した。このような考え方のすべてが、第七回大会の席でM II トレーズとM II カシヤン Marcel Cachin 1869-1938 が発表した、二〇の報告で明示された、フランスの経験に照らして明確にされた。

第七回大会のすべての路線は、民主主義のための闘争と社会主義のための闘争との間の相関関係に関する、レーニン主義的理論にその根拠を置いていた。民主主義のための戦いの中で、労働者階級とその同盟者たちは相互に訓練し合い、社会主義的目的のために必要な戦いの思想に向かって徐々に成長していく。レーニンが述べたように、本質的なものへの闘争は、特殊なものへの闘争から展開される。民主主義のための基礎的な戦いの中に、社会主義のためのより基礎的な戦いの出発点と接近方法とが存在し得た。

第七回大会は、レーニンが生存中の大会、とくに第三回、第四回大会で決定された、労働者農民政府の思想を拡充してとらえた。大会は、コミュニストの義務として、大衆運動の躍進に即応しファシストを打倒する用意のある人民戦線政府を支持すること、さらに独占資本の権力を攻撃し労働者階級と労働世界の立場を強化する用意のある政府を、積極的に支持するよう明示した。この政府は、プロレタリアート独裁ではないが、反動とファシズムに抵抗して闘う政府であった。この権力機関にコミュニストが参加することは、特定の条件の下で承認された。G II ディミトロフは、次のような仮説を考察した。すなわち、統一戦線政府が社会主義権力への移行形態であり、かつ社会主義権力への一步前進を意味するであろう、という仮説がそれであった。

事実、第七回大会での主たる思想は、労働者階級が反ファシッシュ闘争を通じて社会主義的変革のために必要な諸条件を創り出す、新しい民主主義 *une démocratie nouvelle* の勝利であった。この意味で、第七回大会は、社会革命への前

進のための独得な展望を切り開いた。この展望は、より具体的には、一九三六年から一九三八年までのスペイン人民戦線の生きた経験によって「現証」されようとしていた。スペインでは、明らかに社会主義へ前進する新しい民主主義が開始され始めていた。

この大会によって、コミンテルン執行委員会とコミンテルン支部との間の關係に、本質的な変化が導入された。コミンテルン執行委員会は、将来その活動を基礎的な政治的方向づけや戦術の作成に集中しなければならなくなった。さらに、各国支部の内部組織の事件に直接介入することは避けなければならなくなった。これこそ、各国支部が政治的に強化され成長した結果を示すものであり、かつ各国支部が成熟の域に達した証明であった。一九三七年に、G・ディミトロフは、次のように発言している。

「諸党はますます一本立ちとなり、何時何ときでも活動的指導部と同様、自らの政策、自らの戦術を自ら確定する能力をもっていなければならない。そして、われわれは、この目的がすべてのわが支部、すべてのわが党によって最終的に実現されるよう希望している。」⁽¹⁾

コミンテルンは、第七回大会を通じて、労働者たちをより正しい政治的方針で武装することができた。コミンテルンは、最も緊急を要する現実的諸問題に返答を与えた。コミンテルンは、セクト主義や公式主義を拒否し、統一戦線、同盟政策、大衆活動および労働者階級と全人民との連携の必要性について、その偉大な創設者の支配的な思想を新しい条件の中で発展させることによって、マルクスレーニン主義の思想を大胆な創造的方向に発展させた。

コミンテルン第七回大会の前後を画期に、コミンテルン中央とフランス共産党との相関關係の態様に大きな変化が見られた。一九二一年、コミンテルン第三回大会は、組織に関する決議の中で、加盟各国支部とコミンテルン執行委員会がそれぞれ相互に、最良の代表者を送り込むことを決定した。さらに、一九二二年、コミンテルン第四回大会は、組織問題

に関する新しい決議の中で、コミンテルン中央と支部との間に、すなわち「下から上へ」、そして「上から下へ」すべての経験とその結論を、相互に浸透させる二重の必要性を強調した。コミンテルンの周辺から中央へ、そしてコミンテルン中央から周辺へ、各種の情報と思想を循環させることが重要な課題とされた。こうした密度の高い政治的交流が、コミンテルン活動の生命的本質であった。

フランス派遣コミンテルン代表Eフリートは、フランスにおける人民戦線政策を作成するさいに大きな役割を演じた。Jデュクロ Jacques Duclos 1886— が想起しているようにEフリートはハンガリー出身で、一九三〇年までチエコスロヴァキア共産党の幹部として活動した。Eフリートは、豊かな教養の持ち主で、一九三〇年代に家族的な結びつきで完全なフランス人となった。Eフリートは、フランスの政治生活やフランス語に驚くほど精通していただけでなく、フランスの革命史に係わる古い新聞、古いポスターおよび古い資料の熱心な収集家であった。Eフリートは、モントルイユ Montreuil にある歴史博物館の創設に一大貢献を行なった。Eフリートは、第二次世界大戦中、ゲシュタポの手でブリュッセルの地で撃たれた。⁽¹⁸⁾ Eフリートは、Mトレーズに対する政治顧問ではなく、単なる選挙友達であり、Mトレーズとはやや対照的に、より思慮深く、外見上より控え目であった。Eフリートは、フランスの知己たちに細心の注意と親切さを抱き、やさしく明敏に彼らの誤りを指摘した。Eフリートは、極めて開放的で寛大なタイプの人間であって、その特性は、GディミトロフやDマヌリスキーのそれと酷似していた。

スペイン戦争が勃発して、共和国スペインに与えられたソ連および国際的援助の大部分の人間および物資は、フランスを通過していた。レオンブルム政府の不干渉政策にもかかわらず、当時航空相のPロット Pierre Cot 1895—、Pロット閣僚の一委員Jムーラン Jean Moulin 1899—1943、その他若干の人たち、とくにフランス共産党員によって、この移送活動が展開された。やがて、この移送活動がすべて、強制的に急停止させられた。こうした政治的、実践的な問題に対して、コミンテルン書記局は激しい不快感を抱いたが、例えばEフリート(クレマン)はMトレーズに激し

い形での電報や概略的な命令形式のアピールという形で、コミンテルン中央の意向を伝達せず、当時コミンテルン中央にいたG||コニヨ Georges Cogniot 1901— が急遽飛行機で帰国し、イヴリーにあつたM||トレーズの小さな家で、問題を究明するという処理方法を採用した。同様な事例として、一九三四年十月当時、依然としてセクト主義一派に影響を受けていたコミンテルン指導部が、人民戦線に賛同を示すフランス共産党のイニシアティブに一種の恐怖感を抱いたさい、コミンテルン指導部はあくまでその提案を中止するようフランス共産党に命令することはしなかった。前述したように、コミンテルン指導部は、完全に第一級のレヴェルにいたP||トリアッティ(M||エルコリ)をパリに派遣し、M||トレーズと論議させるという方法を採用した。その論議の結果、M||トレーズは、コミンテルン指導部の意見に従わず、正しいと考へたフランス政治局の観測を一步前進させた。このように、コミンテルンとフランス支部との意見の衝突や矛盾は、この頃から上命下服の形式では処理されなくなっていた。

当時、コミンテルン事務局で種々な政治問題が議論される時には、モスクワに滞在している各支部の代表者がすべて招待された。この数十名のメンバーが一堂に会し、ただ一つの問題を検討するにも会議はたっぷり一日中続けられる、という状況であつた。特別に設置される委員会は、付託された諸問題を、長期間にわたりかつ深い証拠作りの下で研究を積み重ねた。コミンテルンの指示や命令がすべて、ロシア共産党政治局やスターリン書記局から、一方交通的に注入されたという断定は下せないように思われる。コミンテルンでの議論や決定は、きわめて科学的性格をもつ努力によって策定され、人間味豊かな内容を有していた。当時、ロシア人以外の活動家、例えばE||フリート(クレマン)、J||デュクロおよびP||トリアッティなどが、コミンテルン内で重要な役割を果たしたケースが、このことを何よりも雄弁に物語っていた。

以上、統一戦線と人民戦線が依拠する理論的問題、この理論が一九三二年以降全国内、国際情勢と関連して発展していくその統一と団結の政策の実践的問題、およびコミンテルンとフランス共産党との間の相関関係の構造と様式の問題な

どを検討してきた。フランス、次いで国際的レヴェルで適用されていった統一戦線および人民戦線政策は、ファシズムが進歩的諸勢力に投入した恐るべき挑戦に対する適格な返答であった。この政策の適用は、労働者階級の役割を一層増大させ、世界的な重要性をもつ転換をもたらした。世界の労働運動史は、新しい局面を迎えた。(未完)

一九七三—一—十五—

一九七四—一—十九—補筆—

- (1) 最新のコミンテルン資料およびコミンテルン研究動向については、例えば、ソ連邦共産党中央委員会付属マルクスレーニン主義研究所編 村田陽一訳『コミンテルンの歴史』上下巻 一九七三年 大月書店 石堂清倫「八研究動向」コミンテルン資料走り読みの記」『季刊社会思想』一九七二年 第二巻第三号 社会思想社 七九二—八二二頁 岩村登志夫「研究動向」ソ連邦におけるコミンテルン研究」『歴史学研究』一九七三、十一 四〇二号 四八一—五七頁 村田陽一「史料文献紹介」コミンテルン文献覚え書 (1) (2) 「『歴史学研究』前掲書 五八一—六七頁および一九七四、一 四〇四号 五二—六三頁などを参照 なお、 Cf. G. Cogniot, L'Internationale Communiste. Aperçu historique. Editions Sociales, Paris, 1969. 156 pp.
- (2) Cf. G. Cogniot, Parti communiste français et Internationale communiste. in Cl. Willard et al., o. c., p. 99.
- (3) Cf. Cécile and Albert Vassard, The Moscow Origin of the French "Popular Front" in M. M. Drachkovitch, B. Lazitch ed., The Comintern, historical highlights. The Hoover Institution, N. Y. 1966. p. 235 ff. Cf. M. Perrot et A. Kriegel, Le Socialisme et le Pouvoir. EDI. Paris, 1966. p. 113.
- (4) Cf. G. Cogniot, o. c., p. 100.
- (5) Cf. Ibidem., p. 102.
- (6) その問題点については、拙稿「フランス人民戦線政府論」鹿兒島大学法文学部『法学論集』第五巻第一号 一九六九年十一月 五七—七九頁参照

- (7) 日本共産党のついでに Cf. J. Droz, *Socialisme et Syndicalisme de 1914 à 1939*. CDU. Paris, 1972. pp. 108-111.
Cf. J.-P. A. Bernard, *Le Parti Communiste Français et la Question Littéraire 1921-1939*. Presses Universitaires de Grenoble, 1972. 341 pp.
- (8) ノーニン「おしめまる破局」それとどうたたかうか」邦訳『ノーニン全集』第二十五巻 大月書店 三四八-三九三頁参照
- (9) ノーニン「ロミン社会民主労働党（ポ）第七回（四月）全国協議会」邦訳『ノーニン全集』第二十四巻 大月書店 二二五-二二七頁参照
- (10) Cf. G. Cogniot, a. c., pp. 108-109.
- (11) Cf. M. Thorez, *La situation du Parti communiste français*. in "L'Internationale Communiste." n° 21. 20-7-1930. pp. 1359, 1360, 1362 et 1364.
- (12) Cf. M. Thorez, *Fils du peuple*. Editions Sociales. Paris, 1970. p. 90. 邦訳トナース『人民の子』日本共産党中央委員会出版部 八五頁参照
- (13) Cf. G. Cogniot, a. c., p. 118.
- (14) Cf. *Ibidem.*, p. 121.
- (15) デイニトロロン 坂井、村田訳『反ファシズム統一戦線』国民文庫 六〇頁参照
- (16) デイニトロロン 同書 一〇九頁参照
- (17) Cf. Archives de l'Institut du marxisme-Léninisme, Moscow, cité dans G. Cogniot, a. c., p. 132.
- (18) Cf. J. Ducloux, 'A la mémoire de mon ami Clément.' in n° 13 des "Cahiers de l'Institut Maurice Thorez." pp. 120-124.

本稿は、昭和四十八年度文部省科学研究費補助金一般研究(D)「反ファシズム運動の基礎的研究—フランス人民戦線およびレジスタンス運動を中心として—」に基づく研究成果の一部である。